

武蔵野日曜聖書講筵

ダビデの晨の祈・夕の祈

――詩篇第3、4篇――

1993年3月14日

小池辰雄

晨の祈り 目ざめたら力が来ていた 二重構造 夕の祈り 神さまに立ち帰り 聖顔の光 詩
についての「おぼえ書き」

【詩篇3】（私訳）

ダビデの絃歌 その子アブサロムから遁れたときの。

1 ああ実存主よ、何と増し加わるかわが敵は！

何と多きや私に起ち向かう者は。

2 何と多きやわが魂に向かつて言う者、

「救いは彼に神からありはしない」と。

3 だがあなたこそは、エホバよ、私を囲む楯。

わが栄光、わが首を抬げ給う方！

4 大声で、エホバに私はいつも呼ばわった。

そのとき彼は応え給うた、その聖山から。

5 私は、寝た。眠った。目ざめた。

エホバが私を支え給うからだ。

6 私は怖れない。千万の民が

私をとり囲んで立ち構えようと。

7 起ち給え、エホバよ！ 救い給え、神よ！

あなたはわがすべての敵の頬骨を撃ち、悪い奴らの歯を砕き給うた。

8 エホバにこそ救いはある。

汝が民に汝が祝福のあらんことを！

【詩篇4】（私訳）

楽長に絃器の伴奏をさせたダビデの絃歌

1 わが号叫に応え給え、わが義の神よ！

窮地を私のために闊くしてください。

憐み給え、わが祈りを聴き給え。

2 人の子らよ！ 何時までわが栄えを恥にするのか。



汝らは虚しきを好み、偽りを慕うのか。

3 だが知れ、エホバは恵信者^{ハシード}を

おのがため別ち給うたことを。

エホバは聴き給う、彼に私が呼ばわるときに。

4 憤る^{ふしど}がいい、ただ罪を犯すな。

汝ら臥床^{ふしど}でおのが心に語って黙せ！

5 義^{よきもの}の供物を献げよ、エホバに依り頼め！

6 多くの者はいう、

「誰^よが嘉きものを我らに見せよう」と。

聖顔の光を我らの上に掲げてください、エホバよ！

7 あなたはわが心に歓びを与え給うた。

彼らの穀物や新酒が豊かであった時よりも更に多く

8 全く安らかに私は寝る、そして眠る。

それはあなたが、エホバよ、

私を独りで平安に処^おらしめ給うから。

●晨の祈り

「アブサロム」というのは、「アブ・シャローム」といって――まるで反語的な名前ですね

――「父は平安である」という意味です。その父に向かつて非常に背いたところの「アブサロム」という息子です。それが兄弟を殺して、ゲシュルに隠れた。詳しくはサムエル後書14章に書いてあります。

ダビデの絃歌 その子アブサロムから遁れたときの。

1 ああ実存主^{エホバ}よ、何と増し加わるかわが敵は！

何と多きや私に起^たち向かう者は。

絃歌とは、絃^{こと}を引きながらの歌で、絃とは琵琶みたいな楽器です。

「エホバ」

というのは、本当は神さまの名前は

「ヤーヴェー」

というんですが、直訳すると「実存者」という意味です。「ハーヤー」という、「在る、在らしめる」という字からきた名詞なので、私は

「実存主^{エホバ}」

と書く。向こうの人は神の名を読む時には、「ヤーヴェー」とは読まないで、

「アドナイ」

と読む。「アドナイ」とは「わが主」という意味です。だから、両方合わせると「実存主」



というので、私は「エホバ」に「実存主」という訳語をつけたわけです。

² 何と多きやわが魂に向かつて言う者

「救いは彼に神からありはしない」と。

そう言つて、みんなけなしている。

³ だがあなたこそは、エホバよ、私を囲む楯。

わが栄光^{さかえ}、わが首^{こうべ}を^{もた}揚げ給う方^{かた}！

⁴ 大声で、エホバに私はいつも呼ばわつた。

そのとき彼は応え給うた、その聖山から。

シオンの山からです。

⁵ 私は、寝た。眠つた。目さめた。

エホバが私を支え給うからだ。

「寝た」というのは横になつたという意味です。この第5節が、「目覚めた」ということで、即ち「晨の祈り」になるわけです。

⁶ 私は怖れない。千万^{ちよろず}の民が

私をとり囲んで立ち構えようと。

⁷ 起ち給え、エホバよ！ 救い給え、神よ！

あなたはわがすべての敵の頬骨^{つらほね}を撃ち、悪い奴らの歯を碎き給うた。

⁸ エホバにこそ救はある。

汝^なが民に汝が祝福のあらんことを！

彼らは祈るときは正直、大声を出して祈る。だから、

「大声で、エホバに私はいつも呼ばわつた」

とある。

「私は、寝た。眠つた。目さめた」

我々でいうと、どんな事がありましたも、眠るときにキリストの中に体を全部ゆだねる。

「主さまー！」

と言つて、全部、キリストの腕を枕にするようなつもりでゆだねる。そうすると、本当に眠れる。そして、目さめるときは、力をいただいている。こういうわけです。これは自分で本当に体験してみないとね。

●目ざめたら力が来ていた

「主さまー！」

という叫びは、同時に自分の体を全部キリストに委ねること、キリストの中に入れることです。ただ叫んでいるのではない。叫ぶと同時に、それが行動でなければ。「言即行」です。それから、「行即言」。この言と行は、



「言うは易く、行いは難しい」

なんてよく言うけれども、そういうような二段構えの考え方では、いつまでたってもダメなんです。即の世界にいかないと。本当の言葉は行いである。行に裏付けられない言葉はむなし。言え、必ずそれは行為に展開する。そういう、言と行との不可離の関係、これが本当の在り方です。

「人間は言うけれども、なかなか行わない」

というのは普通の判断で、また普通の現実です。けれども、神さまの方はこれが即している。

「光あれと言ひ給ひければ、光ありき」

という。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが言われた。あの「霊なり、生命なり」の言葉だから、それが必ず展開していく。だから、福音書を見ると、キリストの言葉は全部それが行為に展開している。また、行為に裏付けられた言葉である。福音書を見たら、そういうわけです。死んでいる青年の入った柩にキリストは手を置いたのは行なんです。そして、

「起きよ！」

と言ったら、棺桶の中から青年が起きて出てきた。凄いことが書いてあるでしょ。正直、大変なひとです、死人を甦えらせるんですから。みんな、あれは本当です。福音書のキリストのところを読んだら、驚嘆驚倒して読まなければ。

「参りました！」

と言って読まなくては。

「そんな事があるだろうか？」

じゃない。降参して読まなくては。そうすると力がある。註解も何も要らない。そういう読み方をしないと、いくら註解書や参考書を読んだってダメだ。あるいは、ディスカッションしたってダメだ。聖書の世界は、ディスカッションでもって、どうのこうのではない。聖霊が宿らなければ、そういう境地に入れません。御霊はありがたい。御霊は何ものとも替えることができない。

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロははっきり言った。ローマ書8章9節、

「然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る、キ

リストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8・9)

とある。

「キリストの御霊なき者はキリスト者ではないぞ」

と。とにかくパウロは、キリストに一番背いていたパウロですよ、それがひっくり返されてしまった、キリストの一番弟子になってしまった。



前がどうだっていいよ、とにかく、本ものになりさえすれば。いつまでたつても、人の過去を何のかんの言う人はその人がダメになる。滑つても転んでも前進してやまず、という。そういう非常に力強い、楽しい世界です。

私たちは、「エホバ」ではない、「キリスト」です。この「^{あした}晨の祈り」は、
「キリストの中に寝た。そしたら安眠できた。そしたら目ざめた。そしたら、力が来ていた」

と、こういうことです。祈りは結局、讃美になる。始めはどんなに苦しくて嘆いていても、絶望的であつても、終りには必ず讃美になる。

●二重構造

讃美というのは、

「あなたは何と素晴らしいキリストか。こつちの問題ではなかった。こつちはプラスチックであらうと、マイナスであらうと、どうだっていいんだ」

ということ。こつちはどんなに闇だつていい。この絶対の光が全部これを光の世界に変えてしまう。闇を排除するのではない。闇を光に変えてしまう。光化する。光に化する。

「汝らは世の光なり」

というのはそのことです。

「私がお前の中に入れば、お前は世の光である」

ということ。

「ありがとうございます」

の他に言いようがない。

「そうですか、なかなか成りませんが」

ではない。成れっこないんだ、自分では。だから、受けとればいい。他力本願です。法然・親鸞の世界です。

『歎異鈔』というのは素晴らしい本です。マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』よりか『歎異鈔』の方がもっと凄い。私は宗派根性はないから、本ものは本ものとしてちゃんとありますから。それが仏教的な現れをしているだけの話なんだ。

「仏教がどうだ、キリスト教がどうだ」

なんて言っているのではない。やっぱ、本当の世界はキリスト道と仏道の他にないね。世界の二大宗教です。それも、この二大宗教を福音の力では渾然と融合してしまふ。キリストの霊は宇宙的だからね。

私は気持が突き抜けてしまっているから、楽しくてしょうがない。あなた方、楽しくないんですか？ 人に何と言われようと、どう思われようと、一向差し支えない。いいね。自分自身が突き抜けていないとダメです。まだ「われ」なんていう我があるうちはダメだ。



我なき我ということ。

人間だから、二重構造だよ。

「ダメな小池」

と

「そうでない小池」

と、二つが一緒になっている。けれども、「そうでない小池」が必ずどん底に居る。だから、ひっくり返らない。ひっくり返っても、ダルマさんみたいに必ず起き上がる。だから、行き詰まらない。皆さん、もし、行き詰まるようだったら、まだ信仰が本ものでないから。絶対に行き詰まらない。ということは、信仰を私しないから。

●キリストが私を支えてくださった

「しんこう」(信仰)の「こう」の字は仰いでいたってダメです。

「信交」

です。キリストと信じ交わる世界に入っていく。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と、パウロが言ったでしょ。あのパウロの境地です。

「われ汝の中に、汝わが中に」

と、キリスト自身が仰っている。

「私は寝た、眠った。目ざめた」

この簡単な言葉が非常に楽しい言葉です。

「私はキリストの中に寝た。眠った。目ざめたら、力が来ました」

ということ。キリストの中に寝て、朝起きたときに、

「主さま、ありがとうございます」

と言う。

世の中には、いろんな不合理や矛盾があり、泣くに泣かぬ、たくさんの人が迫害されて仆れた。しかし、その人たちは天界で輝く。大いに勝ったと思っていいい気になっている奴はみんな地獄ゆきだ。人を迫害した奴はみんな地獄ゆき。あのダンテの『神曲』の地獄は本ものです。それを地獄の形で詩的に表現した。

「神の義がこの地獄を造った。神の愛が天国を造った」

という。ダンテは「コメディア」「喜劇」と言った。さんざん悲劇的なものを経て、喜劇だと言った。ベートーヴェンも、あれだけの苦しみを経て仆れたときに、彼は、

「友らよ、讃美せよ。喜劇は終わった」

と言った。本当の勝利者だね。だから、「第九シンフォニー」なんていう素晴らしいのできる。「第十」まで計画したそう。それはできなかったけれども。天界で作っている。地



上では人間のすることはみんな未完成だよ。未完成交響楽です。天界で完成する。

藤井先生の『羔の婚姻』もそうだ。「天国篇」の第十一歌でお終いになっている。先生はもう二年生きていたら、でき上がったんだけれども。藤井先生も孤独な人だったな。先生の家が全部、焼夷弾で焼かれてしまつて、何も残つてない。まあ、いいよ。先生の書いたものがいつまでも残っているから。

一番残るものは、その人の在り方そのものです。それが天界でもって輝く。

「何をしたか」

ではない。

「いかに生きたか」

です。詩篇第3篇の5節は、

⁵私は、寝た。眠った。目さめた。

エホバが私を支え給うからだ。

これは、キリストにおいて読む。

「キリストが私を支えてくださったからだ」

と。そういう意味で非常に大事な節です。これが「晨の祈り」です。

●夕の祈り

今度は、第4篇「夕の祈り」にいきます。

楽長に絃器ことの伴奏をさせたダビデの絃歌

¹わが号叫さけびに応え給え、わが義の神よ！

窮地を私のために闊くひろしてくださった。

憐み給え、わが祈りを聴き給え。

²人の子らよ！ 何時いつまでわが榮を恥にするのか。

汝らは虚しきを好み、偽りを慕うのか。

³だが知れ、エホバは恵信者ハースードを

おのがため別ち給うたことを。

エホバは聴き給う、彼に私が呼ばわるときに。

「恵信者」という字はもともとヘブライ語の「ハースード」いう字で、

「ヘセッド」「恵み、愛」

という字からきている。だから、エホバの

「愛を受けている者、恵みを受けている者、恵信者」

というのが本当の意味なんです。「ヘセッド」という「恵み、愛」というのは大事な字です。仏教的にいうと「慈悲」という字です。

⁴憤るがいい、ただ罪を犯すな。



汝ら臥床でおのが心に語って黙せ！

⁵義の供物を献げよ、エホバに依頼め！

⁶多くの者はいう、

「誰が嘉^よきものを我らに見せよう」と。

「そんな事はないだろう」と皆は言うけれども、

聖顔の光を我らの上に掲げてくださいます、エホバよ！

⁷あなたはわが心に歓びを与え給うた。

彼らの穀物や新酒が豊かであった時よりも更に多く

⁸全く安らかに私は寝る、そして眠る。

それはあなたが、エホバよ、

私を独りで平安に処^おらしめ給うから。

この8節が「夕の祈り」です。

「全く安らかに私は寝る、そして眠る。それはあなたが私を独りでもって平安に居
らせたもうから、何もこわくない」

と。ジャンバルジャンのあの素晴らしいミリアムとかいう坊さんがいたね。ああいうよう
な境地です。泥棒が来ようが、何か物を持つていこうが、「ああ結構です」と。

「盗んだのですか」

「いえ、盗んだのではない。上げたんです」

と。ああいう魂は完全に突き抜けた愛の魂です。ユゴーの『レミゼラブル』は大変なもの
だね。何回でも読み返さなければならぬ本です。

●神さまに立ち帰り

とにかく、第一流のものを読むに限る。たくさんいろんな本があるけれども。第一流の
ものを、超一流のものを読むに限る。ドイツではゲーテの『ファウスト』。私は『ファウスト』
も偉大な詩だと思ふけれども、ダンテの『神曲』は内容的に最大だと思っている。それぞ
れの善さはあるけれども、『神曲』はぜひ読まなくては。

「全く安らかに私は寝る、そして眠る。それはあなたが、キリストよ、私を独りで
平安に居らせたもうから」

と。グラッドストーンという有名なイギリスの政治家がいる。あの人はどんなことがあつ
ても、寝ると必ず安眠している。それはやっぱり、こういう境地をもっていた人です。ただ、
ゴルドン将軍がカーツームで非業の死を遂げた。もう二日早ければ、ゴルドンを救うこと
ができたのに、それができなかった。非常にグラッドストーンは嘆いた。ゴルドン将軍の
死を聞いた時にその晩ばかりは眠れなかったという。

グラッドストーンとリンカーンとビスマルク、この三人が19世紀の最大の政治家です。



そういう政治家に比べるものは日本にはひとりもない。維新当時の西郷南洲はもちろん匹敵する。そして坂本龍馬。そこらだね。ああいう人物には感嘆する。

詩篇第4篇も、ダビデはいろんな苦しみ zu 遭う。その原因はダビデ自身が作っているものもあるけれども。ダビデも本当にいろんなところを有った男で、プラスもマイナスも両方ともある。王者らしい悪いこともしている。けれども彼には偽りはない。いつも、神さまに立ち帰っている。立ち帰りということが大事です。天界に自分の場を本当に持っている。

立ち帰りの最も著しい例は、十字架の片一方の盗賊です――もう片一方は悪いやつで

「お前は神の子なら救ったらいだろう」

なんて悪いことを言っている――

「私はさんざん悪いことをしました。せめても覚えてください」

と言って立ち帰ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。キリストが「私と一緒にパラダイスだ」と言った、あの「パラダイス」という言葉が、私はあそこでもって本当に素晴らしい言葉だなと思った。「天国」です。

この立ち帰りができない人は本当に困るよ。みんな人間というのは五十歩百歩だ、躓いたり転んだりしているんだ、みんな。どんな偉そうなやつだってダメなんだ、ちつとも偉くはない。ところが、日本人は大体、この立ち帰りを知らない。神無き民主主義だから。「民主主義、デモクラシー」なんて言っても、神がないんだ。

「アンダー・ゴット」

でない。神さま無き民主主義はダメだ。学校の先生方がダメ。西郷南洲は、

「敬天愛人」

と言っている。「天」は「神」のことをいくらでも表す素晴らしい字だ。

「本当の敬天あるところに愛人あり」

ということですよ。

「神を愛することと、人を愛することは一つだ」

とキリストが言った。

南洲は「敬天愛人」と、いいことを言った。言っただけでなく、彼はそういう魂であった。愛の深いひとだ。私は「大人物」と言う時には西郷南洲を思う。西郷南洲や坂本龍馬みたいな大人物はその後、政治家にはでてこない。龍馬も惜しいところで殺された。死んだときは35歳くらいだ。佐久間象山もそうだ。

●聖顔の光

「聖顔の光を我らの上に掲げてください、エホバよ！」

と。聖顔の光はしょっちゅう輝いている。キリストはしょっちゅう輝いている。それを詩



的な表現では、「聖顔の光」というだけの話です。

「キリストは見栄えなきひとだ」

という。ところが、この「見栄えなきひと」が実は一番光っている。その光が見えないか、というわけだ。キリストの目も、パウロの目も光っていたそうだね。それはそうでしょう。神の光がきているんだから、光らざるを得ない。

何しろ、百卒長の娘が死にそうで困っている時に、キリストは何と言ったですか。

「癒えたり!」

と、現在完了で

「もう治ったよ」

と言った。その「治ったよ」というその現在完了の瞬間にもう向こうでは治っている。何キロあったかは知らんけれども。とにかく、そういう霊の現実というのは凄いだから、私たちは「これでいい」なんていうところは一つもない。とにかく、キリストの中に入って、燃えてくださいよ。もう言葉になんかかなりはしない。そういう事を段々体験していくと、何か知らんけれども、不思議な力がくる。そして、何キロ先の人のためにも祈ったって、その人が知らなくても、ちゃんと力が働いている。

「祈りたることはきかれたりとせよ」

ということとは、そのことなんです。

「果たして、きかれるでしょうか?」

なんて思っているうちは、絶対にきかれない。無条件に、キリストの言葉を無条件に受けとって、そのような境地に入って祈ったら、それは必ず力があつて、きかれている。とにかく、非常に簡単なんです、単純なんです。しかし、それはもの凄い元始力、力を持っている。私の言うのは、

「元始力」

キリストの元始の力です。物理の世界は原子力ですが。

「アルケーゴス」「始めなるひと」

という字です。「第一人者」というのはそのことです。キリストはアルケーゴス、始めの人、第一のひとです。また、

「始めはまた終りなり」

です。アルファはオメガなり。

「終りはまた始めなり」

という。分かるですか。世の終りが来ると、今度は新天新地の始めがくる。人生はもの凄い希望を持っている。そして、その新天新地は――単なる希望ではない――現実として私たちは持っている。聖霊を宿せば、この新天新地は来ている。歴史の終末が。だから、それを「終末的現実」という。



「世の中はとうなったっていいよ。天国はもう来ているよ」というわけです。

「とうなったっていいよ」

と言う人が一番本当の歩き方をする。捨てばちになっっているのではない。

「さっぱり、本当の意味で自分の思うとおりにならない。結構です」

と。だから、相対的な原因・結果なんてものを考えてない。そういう魂になったら、これは楽しくてしょうがない。いつも天国だよな。

皆さん、この集会に来て、いつも天国になつて帰らなくてはな。

「今日は煉獄ぐらいだ」

なんてはダメだよ。まして「地獄」では困るよ。

「結局、私は地獄でした」

なんてでは困る。そうじゃない。

「いつも天国、パラダイス」

です。だから、私はパラダイスの次元で詩を書いている。たったこれだけの人に語っているけれども、内容は凄いいんだよ。勿体ないんだ、本当は。あなた方は、是非それを体現してください。体で現じてください。

「我を見よ。私は福音の証者である」

と。証者体現でなかったなら、つまらんです。「聖書の研究」では絶対にならない。研究会で聖書の中に入れるか。冗談じゃない。

あなた方は、もうよく分かっている。以心伝心、以霊伝霊である。何を読んでも、そこところの中心はどれだということをはつきりつかまえないければいかん。

詩篇第4篇の中心は、もちろん8節です。そして、6節の「聖顔の光」という言葉です。

「聖顔の光を我らの上に掲げてください、エホバよ！」

「光を掲げてください」ではない。光はもう既に掲げてある。

私はこの言葉が好きなんだ。ロングフェローの「レイニイデー」という詩の中に、

「雲のかなたには、それでもなお太陽は照っているのだ」

太陽の光は見えなくなつて、太陽の光は常に来ている。人生にはいろんな暗い曇りや雨の日がある。けれども、

「それが曇りであろうと雨であろうと、太陽は必ず光っている。その太陽の光が雲を通して見えないか。あなたの運命はすべての人の普通の運命と同じことだ。だから、かこつな、とやかく言うな。大事なものは輝いているところの太陽を、雲を貫いて霊的に見なくてはダメだ。日常生活の、喜んだ泣いたなんていうことを、ゴタゴタやっているな。いつも、本当の喜びの世界だぞ」ということです。



とにかく、すべては神讚美です。だから、この詩篇第3篇と第4篇は楽しい。晨の祈りと夕の祈り。祈りは必ず讚美であるということ。終りは讚美。詩篇の第22篇もそうだよ。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

で始まっているけれども、終りは讚美になっている。キリストの十字架上の言葉だね。

「わが魂を汝に委ぬ」

と。

●詩についての「おぼえ書き」

昨日、私は詩についてのひとつの「おぼえ書き」を書きましたので、皆さんに読んで聞かせます。

おぼえ書き

1993年3月13日

天弓

本長詩は、パラダイスの霊界の次元に於て、主として同次元的人物、それは何らかの意味に於て筆者を感動させた人物を出遭うまにまに書いた詩群から成っている。それゆえ、歴史的、客観的、論理的秩序によるものではない。謂はば、野や山や谷を散策して瞠目させられる景勝に喜ぶようなものである。特に撰んだわけではないから、見落とした然るべき人物が勿論たくさんある。アンデルセンのお月さんがあちこち照らし廻ったように、あちこちを歩き廻ったので、詩の行数が意外に増えて、おそらく世界最長の詩になるだろう。昨年、1992年から執筆して十二年かかるつもりであるから、2003年頃に擱筆できたらありがたいわけだ。昨年は八八才であったから、できあがるのが九九才、白壽、本になるのが百歳の頃になるわけだ。なぜ、十二年という歳月にしたかという、あの「青の洞門」の禅海和尚が、あの洞門を鑿一本金鎚一槌で十二年間コツコツ穿って遂に穿徹した故事に感激したからである。私もかつて現地に旅して熟々見て感嘆したわけであった。もう一つの理由は聖書の中に十二という数値の重要さが、その著しい用例でうなづけるからである。だから、百歳を目指して、といったら、ノンフィクションの柳田邦男氏が某誌上に「百歳に完成を目指す長編詩への挑戦」という御丁寧な玉文を書かれたので、恐縮千万、且つありがたく思った。ともあれたのしく毎日コツコツやっている。人々は私が百歳という年齢を平気で唱えているのをふしぎに思うだろう。だが私は使命のある限り、神さまは生かしてくださると信じているのだ。

